

岩松暉

いわまつあきひろ



私のジオパーク像

日本におけるジオパーク生みの親として、当時どのようなジオパーク像を描いていたのかと、編集部から寄稿依頼がありました。ジオパークは基本的にユネスコのガイドラインに則っているものであり、時代と共に変わってもいくでしょうから、何ほどの参考になるか分かりませんが、往時を回顧してみたいと思います。

ジオパークを始めた動機

ジオパークを始めたのは2004年のことです。今まで守秘義務で隠されてきた地質地盤情報を国民共有の知的公共財として利活用しようと、元情報地質学会会長だった私の定年退官を待って、NPO法人地質情報整備・活用機構が設立されました。このNPOの目的は名称通り

地質情報の利活用ですが、その他に地学の普及ということもありました。

この災害列島に住む日本人の地学リテラシーがあまりにも低いことを常々遺憾に思っていましたので、同年六月北京で開かれたジオパーク国際会議に関心を持っていました。その年の暮れ、インド洋大津波が起きました。津波は小泉八雲のお陰で英語になっています。地震の直後、日本人観光客が「ツナミだ！」と叫んで逃げてくれれば、それだけで通じますが、どれだけ多くの命が助かったか分かりません。大きな国際貢献になっていたはずですが、それなのに地震国に育った日本人が悠然とビデオカメラを回していたのです。そのために亡くなった方もあるかと思えます。ところが津波の

ない英国の少女が「津波がくるかも知れない」と母親に伝え、ホテル従業員を避難させたそうです。こんなことで良いのでしょうか。「福むらの火」の教訓がすっかり忘れ去られています。地学を国民教育に必要を痛感しました。

第二は人づくりです。国立科学博物館の展示に衝撃を受けました。親指ほどの細い縄文人の骨が飾ってあり、「生まれながらの小児麻痺だったが、手厚い介護で天寿を全うした」と解説にありました。どنگりを求めて流浪していたあの狩猟採集の時代です。大地の子・縄文人は心優しかったのです。しかるに飽食の時代の現代日本はどうでしょう。親殺し・子殺し・虐待と耳を覆いたくなる話ばかりです。一億総都会人になって、感性が麻痺したのではないのでしょうか。

痺したのではないのでしょうか。子供たちを自然の中で心豊かに育てたいと強く思いました。

第三は地方です。一極集中で地方は疲弊しきっています。当時長野大学教授だった大野 晃氏は、「過疎」ではなく、批判覚悟で敢えて「限界集落」という言葉を使っておられました。私の住む鹿児島も例外ではありません。170万国民の三人に一人が鹿児島市民で、極端な一極集中です。地質調査で山間部の集落に行ったら、チャンとした家があり、農機具などそのまま立てかけてあるのに、人っ子一人いません。子供の笑い声どころか、犬も猫も鶏も鳴いていないのです。明るい日差しの中でのこの光景は、崩れかけた幽霊屋敷よりも、背筋が寒くなり

ゾッとしました。

地方の再建は待たなしの状況なのです。その後2007年には夕張市が財政破綻しました。ユネスコジオパークの定義には、持続可能な地域社会の発展という文言があります。何とか地域おこしのツールとして使えないかと思いました。

5つのキーワード

ジオパークを知っていただくために、全国を講演行脚して回りました。もちろん、ジオとエコやユネスコのガイドラインのことは当然触れましたが、設立・運営の留意点として、次の五つについて

強調しました。観光の単なる道具と見なされては困ると思ったからです。

①ボトムアップ

今まで地方は中央の収奪の場でした。教育費をかけてセッセと人材を養成しませす。彼らは働き盛りには中央でセッセと納税します。そして老いたら故郷に帰ってきて、介護費用は地方負担なのです。一方、地方自治体も交付金頼みの受け身の姿勢で、目は中央ばかり向いています。地元は逃げ出せないのですから、性根を据えて、地元の資源・遺産・人材そして知恵を活用して、真の意味の地域主権を確立する必要があります。GDP至上主義から発想を転換し、民主導でこの国のカタチを変えたいのです。今のはやり言葉で言えば「里山資本主義」を実現したいと思ったのです。

②ソフト

従来の国主導プロジェクトはハコモノ主義で、地方は結局中央業者の食い物にされてきただけです。地域に既にある宝を再認識し、それを前面に出していきたい。そのためには物語を語るの暖かな人間性を持った語り部が重要です。人こそ要です。地質地形だけでなく、動植物も歴史も語れるマルチ人間が必要です。一方、こうした活動を通じて子供たちに地元を誇りを持ってもらい、感性豊かに育って欲しいと思います。そ

うすれば地元で定着する子も出てくるのではないのでしょうか。

③サステナブル

認定が自己目的化しては困ります。一時的ブームに終わらせることなく、長く続くことが重要です。そのためには、何らかの経済的裏打ちも必要です。ジオツーリズムで交流人口を増やすこともその一つです。住民自らが政策企画立案能力を身につけ、草の根から地域を再生していくことも視野に置いておくことが必要なのではないでしょうか。

④コラボレーション

自然界はもともとシームレスです。エコだ、ジオだ、と境界を設けたのは人間です。エコとジオだけでなく、郷土史など各方面との協力協働を推し進め裾野を広げましょう。お役所も、教育は教育委員会、観光は観光課、防災は危機管理課と縦割りで先例墨守、相互の連携がありません。ジオパークはその壁を打ち破り、自治体が一丸となって町おこしに立ち上がる機会を提供するのではないのでしょうか。さらには、産官学、国と地方、観光協会、商工会、農協、漁協などとも立場の違いを乗り越えて協力し合ひましょう。

⑤ホスピタリティ

四国遍路が何百年も続いているのは、地元で「お接待」の風習があるからです。山形の芋煮会も外向けの観光行事で

はなく、住民自身が楽しんできたからこそ、人が集まってくるのです。住民が郷土に誇りを持ち、幸せに暮らしていることが最大の観光資源なのではないでしょうか。何よりも子供たちに郷土愛と真心を育て、おもてなしの心を身につけさせる教育が重要だと思います。

まとめると、地元には既に地質遺産や人文遺産など地域の宝に誇りを持ち、それを前面に出してジオツーリズムを展開し、域外から多くの方々に来てもらうと同時に、地域に新たな産業を起こし、地域を活性化していくことが重要です。企業誘致やマネー資本主義に未来はありません。西洋史の木村尚三郎先生は「商業で世界を制覇したオランダやポルトガルは衰退したが、第一次産業を一貫して大事にしてきたフランスは、今でも世界政治と文化の中心にいる。カルチャーの語源はラテン語の耕すだ」と言っておられました。地に足の着いた発展策を模索しましょう。皆が幸せで活気に満ちたところにはリーダーも来ます。フランスは観光大国でもあります。ダメ押しですが、ユネスコの正式名称は国連教育科学文化機関です。教育が一番先に来ます。観光振興が主目的でないことを肝に銘じてお

いてください。



「日本ジオパークネットワーク表彰」について

この表彰は、日本におけるジオパーク活動の普及発展に寄与し、その貢献が特に顕著な個人もしくは団体を顕彰する目的で定められたものです。2013年10月15日第4回日本ジオパーク隠岐大会にて、栄えある第1回受賞者として岩松暉さんが顕彰されました。

岩松暉さんは、2004年に設立されたNPO地質情報整備活用機構(GUPI)の専務理事、会長としてジオパークの調査を進め、関係学会や環境省等との調整役として奮闘されました。2007年10月のジオパーク連絡協議会では発起人として、同年12月のジオパーク連絡協議会設立時には事務局長として活躍され、以降、2009年5月に日本ジオパークネットワークが設立されるまで、今日のJGNの基礎を築かれました。